

大学生のヘルスコンサーン (Health Concerns) について

江口篤寿, John T.Fodor*, 藤田大輔**
市村国夫***, 岸本弘子****

Health Concerns of the College Students

Atsuhisa EGUCHI, John T. FODOR, Daisuke FUJITA,
Kunio ICHIMURA, and Hiroko KISHIMOTO

Abstract

The purpose of this study was to identify the verbalized health concerns of the college students.

The data collected will be used to initiate the development of relevant health education curriculum.

There were 641 respondents among the students in a university and 2 junior colleges.

34 potential health concerns were presented to the respondents. For each item, respondents were asked to indicate a choice between three levels of concern—"little or no concern", "moderate concern" and "very high concern".

The results were summarized as follows:

1. Most of the health concerns identified as being among the top health concerns were more pervasive societal issues, such as water pollution, air pollution, malpractice, traffic accidents etc.
2. While accidents and suicide are ranked as the top and second leading cause of death among male youth in Japan, male respondents were least concerned about them than female respondents.
3. Abortion among high school students and illegitimate pregnancy were less concerned by the respondents, though these issues are significant health problems among adolescents in Japan.
4. Those health issues which respondents were least concerned were more personalized and less pervasive health issues, such as drinking alcohol, gum disease, tooth decay and cigarette smoking.

* 米国カリフォルニア州立大学ノースリッジ校健康科学部 (元筑波大学特別招へい教授)
* 筑波大学大学院修士課程体育研究科
*** 常盤学園短期大学 (元筑波大学体育科学系技官)
**** 立教女学院短期大学

Key words: Health concerns · Health education · Pollution · Accident ·
Cigarette smoking

はじめに

国民にとっての重要な健康問題は、死因統計、国民健康調査、保健衛生基礎調査等の資料から把握することができる。そして、これらの健康問題の解決改善を指向した保健行動をとらせるように指導することは健康教育の役割であるが、健康教育カリキュラム作成にあたっては、被教育者が健康問題に対してどのような問題意識をもっているかを知ることが必要である¹⁾²⁾³⁾。

これまで、わが国では健康に関する意識調査は割合に広く行われているが、どのような健康問題を気がかりと考えているかというような調査はあまり見当たらない⁴⁾。これは一つには、ヘルスコンサーン (Health Concerns) 「健康について気がかりなこと」という概念⁵⁾⁶⁾を端的にあらわすことばがないためとおもわれる。

われわれは1983年に、一般の人々はどのような健康問題に対して問題意識をもっているかを明らかにするために、ヘルスコンサーンに関する調査として、現在、わが国で話題としておりあげられるような健康問題34項目について、それぞれ気がかりな問題とおもうか否かを、全国学校総覧から地域特性を考慮して抽出した小・中・高校42校の保護者 (各校90名ずつ) を対象として調査を行った⁷⁾⁸⁾。

そして、今回、小・中・高校における健康教育を一通り終了した者のヘルスコンサーンをみることにより、大学における健康教育カリキュラム作成の基礎資料を得ることを目的として、1983年に行った調査と同じ様式で大学生を対象として調査を実施した。

調査対象および調査方法

昭和61年6月、4年制大学1校、2年制短期大学2校の1、2学年の学生を対象に、一

般教育保健体育の授業時間に調査票を配布し、原則としてその場で記入させて回収したが、一部は授業時間中に配布し、指定場所に回収する配票調査法で実施した。

調査票は、性別、学校種別、学年を記入させるが、無記名とし、列記された健康問題34項目毎に、国民の健康という観点から、①あまり重要とは思わない、②多少要重であり、そのまま放っておかない方がよいと思う、③とても重要なことでいつも非常に気になる、④何の意見もない、の4段階の中から、それぞれ一つを選択させた。

調査結果と考察

調査に回答した学生は3大学計641名で、うち、男子268名、女子371名、性別不明2名である。

回収された調査票の集計分析にあたっては、「非常に重要」と回答したものを3点、「やや重要」と回答したものを2点、「あまり重要とは思わない」との回答を1点として、健康問題34項目毎に、男女別にそれぞれ平均点と標準偏差を算出して、この平均点をそれぞれ健康問題意識度とした。

図1および表1に示すように、健康問題の種類によって、男子の方が女子よりも健康問題意識度の高いものと、女子の方が男子よりも高いものがあるが、全般的な傾向としては女子の方が高く、男女間に意識度の有意差がみられる4項目 (騒音、自然災害、肥満、自殺) のうち、騒音以外は女子の方が高い。

意識度が高い項目から順番にならべた表2にみられるように、上位10位までの健康問題は、順位には若干のちがいがみられるが、項目は男女とも一致していることは興味あることである。そして、上位1位から3位までの項目、つまり、公害 (大気汚染、水質汚濁)

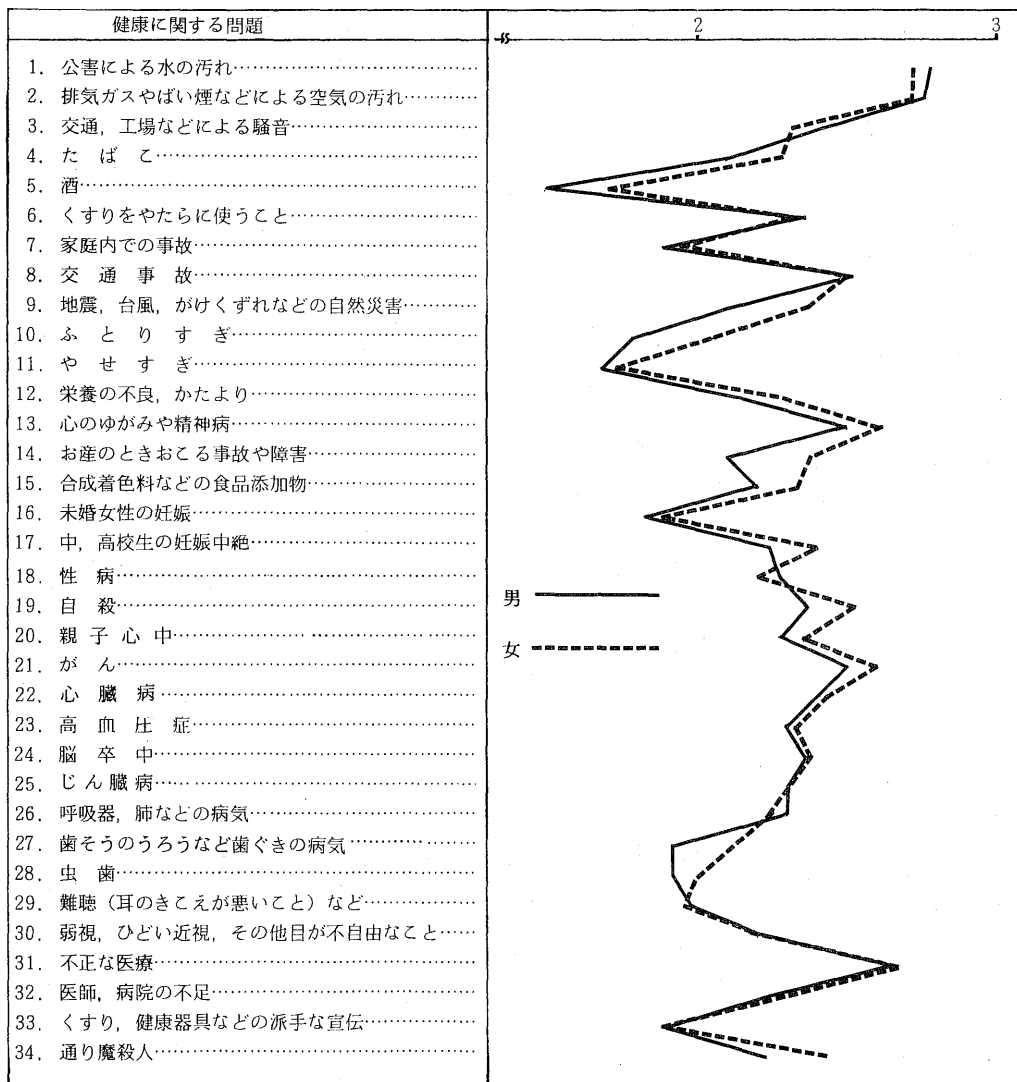


図1 健康問題項目別性別意識意識度

および不正な医療のように、大学生の年代の男女に直接それほど密接なかかわりあいはなくとも、国民の多数にかかわる問題として、社会正義、社会的公正という立場から容認できないような事項に、男女とも高い問題意識を示していることは、わが国の青年の意識の一般的な動向に合致している⁹⁾。

これら上位3位について、女子は自殺に高い問題意識を示していることは、この年代の

女子の死因順位の1位乃至2位であることと合せて考えると¹⁰⁾、妥当とおもわれる。ただし、男子の場合、この年代では自殺が死因順位では概ね2位であるが、自殺の件数は男子の方が女子よりも多いのに、意識度は女子の方が有意に高いことは考慮すべきことである。

大学生の年代で、男子の死因順位の1位は不慮の事故であり、かつ、その3分の2は交

表1 健康問題項目別性別意識順位

項 目	男 子	女 子
1 公害による水の汚れ	2.813	2.747
2 排気ガスやばい煙などによる空気の汚れ	2.795	2.760
3 交通、工場などによる騒音	2.470	2.372
4 たばこ	2.336	2.437
5 酒	1.791	1.914
6 くすりをやたらに使うこと	2.440	2.431
7 家庭内での事故	2.209	2.235
8 交通事故	2.571	2.639
9 地震、台風、かけくずれなどの自然災害	2.291	2.531
10 ふとりすぎ	2.060	2.297
11 やせすぎ	1.970	2.073
12 栄養の不良、かたより	2.295	2.340
13 こころのゆかみや精神病	2.642	2.698
14 お産のときおこる事故や障害	2.530	2.582
15 合成着色料などの食品添加物	2.340	2.399
16 未婚女性の妊娠	2.243	2.226
17 中、高校生の妊娠中絶	2.500	2.547
18 性病	2.493	2.499
19 自殺	2.582	2.706
20 親子心中	2.601	2.631
21 がん	2.653	2.685
22 心臓病	2.534	2.596
23 高血圧	2.474	2.561
24 脳卒中	2.515	2.574
25 じん臓病	2.489	2.515
26 呼吸器、肺などの病氣	2.459	2.434
27 歯そろうのうろうなど歯ぐきの病氣	2.183	2.081
28 虫歯	2.075	2.097
29 難聴(耳のきこえが悪いこと)	2.164	2.175
30 弱視、ひどい近視、その他目が不自由なこと	2.347	2.321
31 不正な医療	2.772	2.825
32 医師、病院の不足	2.437	2.477
33 くすり、健康器具などの派手な宣伝	2.366	2.283
34 通り魔殺人	2.653	2.693

通事故であること、および、この年代の男子は交通事故の加害者になる頻度が高いこと¹¹⁾、とも合せて考えると、交通事故への問題意識が男女とも10位以内とはいえ、社会正義という立場から示した上位3項目にくらべるとかなり低いことは、重要な問題である。とくに、統計的に有意差はみられないが、男子の方が女子よりも意識度が低いことも、考慮すべき問題と思われる。

上位10位以内の項目には、これまでに述べたように、若干の問題はあるとしても、がんおよび心臓病のように、国民の死因順位の上位を占めているもの¹²⁾、現在、社会的に関心がもたれている精神衛生にかかわる事項としての精神障害、ならびに生命尊重と社会正義の立場から重要な問題と思われる通り魔殺人、および親子心中があげられていることは、大学生が個人的な健康問題よりも、むしろ社会的な健康問題で、かつ、広く語題になっていることがらに問題意識をもっていることが

表2 性別意識順位

順位	男 子	女 子
1	水質汚濁 2.813	不正医療 2.825
2	大気汚染 2.795	大気汚染 2.760
3	不正医療 2.772	水質汚濁 2.747
4	がん 2.653	自殺 2.706
5	通り魔殺人 2.653	精神障害 2.698
6	精神障害 2.642	通り魔殺人 2.693
7	親子心中 2.601	がん 2.685
8	自殺 2.582	交通事故 2.639
9	交通事故 2.571	親子心中 2.631
10	心臓病 2.534	心臓病 2.596
11	分娩事故 2.530	分娩事故 2.582
12	脳卒中 2.515	脳卒中 2.574
13	妊娠中絶 2.500	高血圧症 2.561
14	性病 2.493	妊娠中絶 2.547
15	腎臓病 2.489	自然災害 2.531
16	高血圧症 2.474	腎臓病 2.515
17	騒音 2.470	性病 2.499
18	呼吸器病 2.459	医療不足 2.477
19	薬品乱用 2.440	たばこ 2.437
20	医療不足 2.437	呼吸器病 2.434
21	誇大宣伝 2.366	薬品乱用 2.431
22	視力障害 2.347	食品添加物 2.399
23	食品添加物 2.340	騒音 2.372
24	たばこ 2.336	栄養異常 2.340
25	栄養異常 2.295	視力障害 2.321
26	自然災害 2.291	肥満 2.297
27	未婚妊娠 2.243	誇大宣伝 2.283
28	家庭内事故 2.209	家庭内事故 2.235
29	歯周疾患 2.183	未婚妊娠 2.226
30	聴力障害 2.164	聴力障害 2.175
31	虫歯 2.075	虫歯 2.097
32	肥満 2.060	歯周疾患 2.081
33	やせ 1.970	やせ 2.073
34	酒 1.791	酒 1.914

うかがわれる。

なお、グッドロー (Goodrow) が米国で大学生を対象として行ったヘルスコンサーン調査⁶⁾では、がんが1位、精神障害が7位となっているし、水質汚濁が3位、大気汚染が5位となっており、わが国の学生のヘルスコンサーンと類似の動向を示していることは、興味あることである。

しかし、中、高校生の妊娠中絶に対しては、男女ともあまり高い問題意識を示さないこと、それに統計的に有意差はみられないが、

加害者の立場になる可能性がある男子の方が被害者となる女子よりも問題意識が低いことは、たとえ、中、高校生の健康問題とはいえ、近年、若年者、とくに中、高校生の妊娠中絶が増加していること¹³⁾と合せて考えるとき、重要な問題であり、性教育の重要性を示唆するものと思われる。なお、未婚女性の妊娠については、男女とも問題意識が一段と低いことも、あわせて重要な問題と思われる。

近年、喫煙の害が国際的に大きな問題となり、欧米諸国では喫煙防止教育が健康教育の重要な柱となっているが¹⁴⁾、今回の調査では、男女とも喫煙に対する問題意識があまり高くない。因みに、米国における大学生対象のヘルスコンサーン調査では⁶⁾、喫煙が4位となっており、彼等はたばこに対して非常に高い問題意識をもっていることがうかがわれる。

肥満に対しての意識度は男女とも高くないが、女子の方が男子よりも有意に問題意識が高いことは、女子にやせ願望が強いことから^{15) 16)}、当然のことと思われるが、騒音に対しては男子の方が有意に問題意識が高いこと、および自然災害に対しては女子の方が有意に問題意識が高いことは、今後検討すべき課題である。

虫菌および菌周疾患に対して、男女ともに問題意識が低いことは、現在、児童生徒等の被患率が著しく高く、学校保健の分野で虫菌予防は重要な課題となっていることから、健康教育としての虫菌予防の指導のあり方について考慮することが必要である。そして、飲酒についての問題意識が最低であるが、近年、大学生の急性アルコール中毒症の発生がしばしば話題になることから¹⁷⁾、飲酒について正しい理解を与えることが重要と思われる。

これまでに述べたことから、虫菌、菌周疾患やたばこ、酒のような、個人的な生活にかかわる健康問題に対しては、あまり問題意識

をもっていないことがうかがわれるが、これは健康教育をすすめるにあたって、十分に考慮すべきことと思われる。

これまでに述べた健康問題意識度の項目による相違ならびに男子と女子の相違は、健康問題に対する重要性の意識化における視点の構成の相違によるものと思われるので、健康問題34項目について、因子分析（バリマックス回転法）を行い、両群における健康問題意識化にかかわる視点としての因子を求めた。その結果、男子は8つ、女子は9つの因子が得られた。

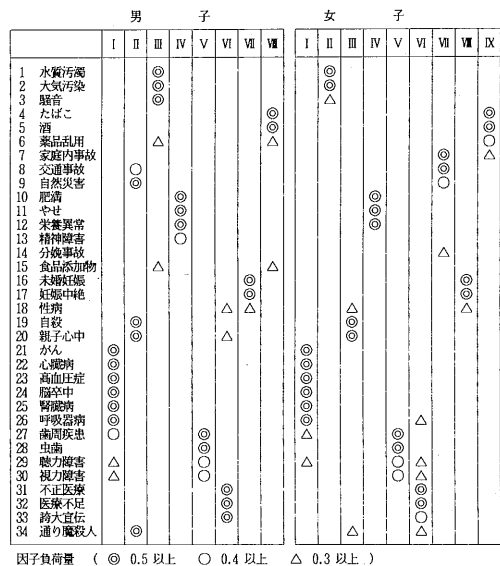


図2 因子構成図

男子については疾病的、生命的、科学技術的、栄養的、身体障害的、社会病理的、性行動的および嗜好的の8因子が得られたのに対して、女子については、疾病的、環境的、生命的、栄養的、身体障害的、医療的、事故災害的、性行動的および嗜好的の9因子となった。

これらの結果から、男子と女子の視点の相異の特徴的なことの一つは、男子は公害だけでなく「くすりをやたらに使うこと」(薬品乱用)や食品添加物についても、ほぼ同じよ

うな視点から、科学技術がもたらした弊害として考えているのに対して、女子は公害問題だけを環境という一つの視点からみていることである。

また、人間の生命にかかわる問題、とくに人間を殺傷するおそれのある問題として、男子は自殺、親子心中、通り魔殺人と合わせて、交通事故および自然災害を共通の視点からみているのに対して、女子は自殺、親子心中および通り魔殺人と性病をある程度共通の視点から考えている一方、交通事故と自然災害は生命にかかる問題とは別の視点から、家庭内事故および「お産のときおこる事故や障害」と合せて、ほぼ共通の問題として扱っているようである。つまり、女子は事故災害という視点をもっていることは、男女の間での視点の相違として特徴的なことと思われる。

もう一つの特徴的なことは、男子は「不正な医療」「医師、病院の不足」および「くすり、健康器具などの派手な宣伝」つまり、医療にかかわる問題と、自殺および親子心中について、ほぼ同じような視点からみているようであり、これらを社会病的な問題として扱っていると推測されるのに対して、女子は医療にかかわる問題と、呼吸器疾患、聴力障害、視力障害および通り魔殺人について、ある程度共通の問題という考え方を示していることから、通り魔殺人についての説明は困難であるが、その他については、医療がかかえている問題と同時に医療の限界という視点から、これらの問題をとらえているのではないかと思われる。

因子分析から得られた知見を総括すると、現在、大学生の年代の国民の死因順位の1位が、男子は不慮の事故、女子は自殺あるいは不慮の事故であるが、本調査で、男子は交通事故も自殺も生命にかかわる問題として、同様の視点からみているのに対して、女子は事故と自殺についての視点が分離していることは興味あることで、安全教育のあり方につい

ては示唆するところが大きい。

男女ともある程度の問題意識をもつ医療関連の問題についても、男子と女子の間で視点に若干の相違がみられるが、健康教育においてセルフケアを含めた医療資源の適切な活用の仕方についての教育が必要なことが示唆される。

環境問題についても、大学生は高い問題意識をもっているようであるが、男子は科学技術とのかかわりあいという視点からみているのに対して、女子はいわゆる公害としてのみ扱っているようであり、小泉等の健康概念に関する研究¹⁸⁾の中で、科学技術と健康とのかかわりを論じている成果をも考慮しつつ環境問題に関する対応を検討する必要があることを示唆していると考えられる。

ま と め

健康教育をすすめるにあたっては、被教育者が健康問題に対して、どのような問題意識をもっているかを明らかにすることが必要である。

そこで、大学生が健康問題にどのような問題意識をもっているかを明らかにし、大学生に対する健康教育の効果的なすすめ方の基礎資料を得ることを目的とし、4年制大学1校、2年制短期大学2校の学生を対象として、ヘルスコンサーンに関する調査を実施し、下記のような知見と示唆を得た。

1. 大学生は、水質汚濁、大気汚染、不正医療、精神障害、通り魔殺人や交通事故のような社会的な問題で、かつ、人々の関心をよぶような健康問題に対して、高い問題意識をもっていることがうかがわれるが、環境問題、生命にかかわる問題や医療にかかわる問題については、男子と女子の間に若干の視点の相違がみられる。
2. 女子は、大学生の年代の女子の死因順位が概ね1位である自殺に対して、かなり高い問題意識をもっているが、男子はその年代の

男子の死因順位1位である不慮の事故の原因の大きな割合を占める交通事故、および死因順位は2位であるが件数は女子よりも多い自殺に対して、女子よりも問題意識が多少低いことは、大学生に対する安全教育の必要性を示唆するものと思われる。

3. 中、高校生の妊娠中絶の増加が、現在、社会では大きな問題となっているが、これに対する大学生の問題意識はあまり高くない。また、妊娠中絶とかかわりあいの深い未婚女性の妊娠についても、問題意識は高くない。それゆえ、性教育を充実することが必要である。

4. 現在、児童生徒等の疾病異常の中で、罹患率が著しく高く、学校保健の分野で重要な問題となっている虫歯と歯周疾患、国際的にその害が大きな話題となっているたばこ、ならびに、時おり、大学生の中から急性中毒症が発症して世間の話題となる飲酒のような、個人の生活の仕方、ライフスタイルにかかわる健康問題については、一般的に問題意識が高くないことも、健康教育のあり方に示唆するところが大きいと思われる。

この研究は(財)健康科学振興財団昭和60年度研究助成による「日本人のヘルスコンサーン(Health Concerns)に関する研究」の一環として行った。

本調査の実施にご協力いただいた筑波大学体育センター教官の方々に深く感謝する。

引用文献

1) Bedworth, D. A. and Bedworth, A. E.: Health Education, p. 76, Harper & Row Publishers,

New York 1978

- 2) Breckon, D.J. et al: Community Health Education, p. 61 An Aspen Publication, Maryland 1985
- 3) Fodor, J.T. and Dalis, G.T.: Health Instruction, p. 13~24, Henry Kimpton Publishers, London 1981
- 4) 昭和60年度健康づくりに関する意識調査報告書, (財)健康・体力づくり事業財団 1985
- 5) DeRoos, K.K.: Assessing Low Income Health Concerns, Health Education 8: 29~31, 1977
- 6) Goodrow, B.: Does Time Change the Health Concerns of College Students? Health Education, 8: 34~35, 1977
- 7) 江口篤寿, 市村国夫, 武田 文: 日本人のヘルスコンサーンに関する研究(第1報), 民族衛生50 Suppl. 188~1984
- 8) 江口篤寿, 市村国夫, 武田 文: 日本人のヘルスコンサーンに関する研究(第2報), 民族衛生51 Suppl. 68~69, 1985
- 9) 1980年国際価値会議事務局: 13カ国価値観調査データブック 366~371 (財)余暇開発センター, 東京1980
- 10) 国民衛生の動向 昭和61年 厚生指針臨時増刊: 60~61 (財)厚生統計協会 東京1986
- 11) 前掲書10): 57~59
- 12) 前掲書10): 384~387
- 13) 林謙治: 性の価値観, 性行動の変化, 保健室経営第15章: 56~61 (株)ぎょうせい, 東京1985
- 14) 川田智恵子: たばこと健康, 公衆衛生50: 220~223, 1986
- 15) 青山昌二: 女子大学生の自分の理想とする体格, 学校保健研究20: 196~200, 1978
- 16) 近藤恵子: 形態についての自己認識—女子短大生の意識調査を中心として—保健の科学24: 418~422, 1982
- 17) 額田榮: 戦後における飲酒量急増の背景とアルコール問題の第1次予防, 公衆衛生47: 770~777, 1983
- 18) 小泉 明: 健康概念に係わる理論的研究, 昭和60年度科学研究費 総合研究(A), 研究成果報告書 p.12 東京大学医学部公衆衛生学教室1986